

2010年3月号 目次

【トピックス】

- アレルギー物質を含む食品の検査結果(その2) 1
- 残留農薬検査(その4) 3
- 平成21年度 公衆浴場浴槽水の水質実態調査 7

【感染症発生動向調査】

- 感染症発生動向調査委員会報告 2月 9
- 感染症発生動向調査における病原体検査 2月 12

【情報提供】

- 衛生研究所 WEB ページ情報(21年度2月分) 13

アレルギー物質を含む食品の検査結果(その2)

平成13年4月、食物アレルギーを持つ人の健康危害を未然に防止する観点から、アレルギー物質(特定原材料)を含む食品に表示が義務付けられました。現在、特定原材料として卵、乳、小麦、そば、落花生、えび、かにの7品目が指定されています。

平成22年1月に、健康福祉局食品専門監視班が市内の製造所や小売店、横浜市学校給食会において収去したもの並びに通信販売で買上げたもの(食物アレルギーがある人のために製造されたものや特定原材料の表示がないもの)について、卵とえび・かにの検査を行いました。えび・かにについては、平成20年6月に特定原材料に追加され(現在は表示について2年間の経過措置期間中である)、今回当所で初めて検査を行いました。

なお、平成21年6月及び10月に行ったアレルギー物質の検査結果については、平成21年12月号の検査情報月報に掲載されています。

1 卵の検査

魚肉ねり製品、麺類等14検体について、卵の検査を行いました。ELISA法によるスクリーニング試験の結果、惣菜(手作り豆腐ハンバーグ)と菓子類(中華菓子)の2検体については陽性(10ppm以上)でしたが、それ以外はすべて陰性(10ppm未満)でした(表1)。

スクリーニング試験で陽性^{*1}となった手作り豆腐ハンバーグと中華菓子の2検体についてウェスタンブロット法による確認試験を行ったところ、結果はいずれも陽性でした。

なお、現在陽性となった原因について食品専門監視班が市内の製造所を調査中です。

表1 卵の検査結果(平成22年1月分)

食品	スクリーニング試験		確認試験	
	検体数	陽性数	検体数	陽性数
魚肉ねり製品	4	0	0	0
麺類	4	0	0	0
惣菜	3	1	1	1
菓子類	3	1	1	1
合計	14	1	2	2

2 えび・かにの検査

惣菜、魚肉ねり製品等24検体について、えび・かにの検査を行いました。ELISA法によるスクリーニング試験の結果、惣菜(鶏肉焼売)と魚肉ねり製品(いわしバーグ)の2検体については陽性(10ppm以上)でしたが、それ以外はすべて陰性(10ppm未満)でした(表2)。

スクリーニング試験で陽性^{*1}となった鶏肉焼売といわしバーグの2検体についてPCR法による確認試験を行ったところ、結果はいずれも陽性でした。

なお、陽性となった2検体について食品専門監視班が調査を行いました。鶏肉焼売については、市内の製造所を調査した結果、原材料での使用はなく、同じ製造所でえびを使用した食品をつくっているため、製造工程中のコンタミネーションによるものと推定されました。また、いわしバーグについては、製造所を管轄する自治体を通して調査した結果、製造所ではえび・かにを取り扱っていないとのことであり、原因は不明でした。

表2 えび・かにの検査結果(平成22年1月分)

食品	スクリーニング試験		確認試験	
	検体数	陽性数	検体数	陽性数
惣菜	11	1	1	1
魚肉ねり製品	8	1	1	1
調味料	3	0	0	0
菓子類	1	0	0	0
その他の食品	1	0	0	0
合計	24	2	2	2

^{*1} ELISA法によるスクリーニング試験は、抗原抗体反応を利用して食品中に含まれる特定のタンパク質(アレルゲン)を検出する方法ですが、食品の加工度合いや使用原材料によっては、偽陽性となる場合があります。そのため、スクリーニング試験で陽性となった場合は確認試験を行っています。確認試験にはウェスタンブロット法とPCR法の2種類があります。卵については、電気泳動により分子量で分離して抗原抗体反応を行うウェスタンブロット法を、また、えび・かにについては、特異的なDNA領域を増幅して検出するPCR法を用いて確認しています。

【 食品添加物担当 】

残留農薬検査(その4)

当所では、横浜市内に流通する農作物や食肉等の食品に残留する農薬について検査を行っています。平成18年5月に施行されたポジティブリスト制度に伴い、現在では有機リン系農薬、有機塩素系農薬、ピレスロイド系農薬及び含窒素系農薬の約90項目について検査を行っています。

今回は平成22年1月から2月末日までに行われた検査結果を報告します。

1 国内産農作物

国内産農作物の残留農薬検査は今年度4回目の実施となりました。今回は1月に食品専門監視班によって搬入されたにんじん(3検体)、いちご及びびみかん(各2検体)の計7検体について検査を行いました。結果を表1に示しました。

その結果、いちご1検体からアセタミプリドが0.16ppm検出され、別のいちご1検体からマイクロブタニルが0.05ppm検出されました。ただし、検出された農薬について残留農薬の基準値を超えるものはありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

2 市内産農作物

横浜市内で生産されている農作物の残留農薬検査は今年度5回目の実施となりました。今回は1月に食品専門監視班によって搬入されたほうれんそう(3検体)及びびはくさい(2検体)の計5検体について検査を行いました。結果を表1に示しました。

その結果、すべての検体から農薬は検出されませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

3 輸入農作物

輸入農作物の残留農薬検査は今年度2回目の実施となりました。今回は1月に食品専門監視班によって搬入されたグレープフルーツ、かぼちゃ(各3検体)、バナナ(2検体)、いんげん、ブロッコリー、アボカド、スウィーティ、メロゴールド、メロン及びぶらズベリー(各1検体)の計15検体について検査を行いました。結果を表1に示しました。

その結果、かぼちゃ1検体からエンドリンが0.02ppm検出されました。ただし、検出された農薬について残留農薬の基準値を超えるものはありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

4 冷凍食品

冷凍食品の残留農薬検査は今年度2回目の実施となりました。今回は2月に福祉保健センター(旭、港南、港北、瀬谷、都筑)によって搬入されたスイートコーン(5検体)、えだまめ、さといも、ブロッコリー(各2検体)、いんげん、こまつな、モロヘイヤ及びマンゴー(各1検体)の計15検体について検査を行いました。結果を表1に示しました。

その結果、えだまめ1検体からシペルメトリンが0.18ppm検出され、別のえだまめ1検体からシハロトリンが0.01ppm検出されました。ただし、検出された農薬について残留農薬の基準値を超えるものはありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

今回の検査によって検出された農薬については、解説を参考にしてください。

表1 残留農薬検査結果

(平成22年1月～2月末)

農作物	産地	検査 検体数	農薬検出 検体数	検出農薬名	検出値 (ppm)	基準値 (ppm)
国内産農作物						
にんじん	国産	3	0			
いちご	国産	2	1	アセタミプリド	0.16	5
			1	マイクロブタニル	0.05	1.0
みかん	国産	2	0			
市内産農作物						
ほうれんそう	横浜市	3	0			
はくさい	横浜市	2	0			
輸入農作物						
グレープフルーツ	アメリカ	3	0			
かぼちゃ	メキシコ・ニュージーランド	3	1	エンドリン	0.02	0.05
バナナ	フィリピン	2	0			
いんげん	オマーン	1	0			
ブロッコリー	アメリカ	1	0			
アボカド	メキシコ	1	0			
スウィーティ	イスラエル	1	0			
メロゴールド	アメリカ	1	0			
メロン	メキシコ	1	0			
ラズベリー	チリ	1	0			
冷凍食品						
スイートコーン	アメリカ・ニュージーランド	5	0			
えだまめ	タイ・台湾	2	1	シペルメトリン	0.18	5.0
			1	シハロトリン	0.01	1.0
さといも	中国	2	0			
ブロッコリー	エクアドル	2	0			
いんげん	タイ	1	0			
こまつな	中国	1	0			
モロヘイヤ	タイ	1	0			
マンゴー	メキシコ	1	0			

表2 農薬の検査項目及び検出限界(92項目)

農薬名	検出 限界 (ppm)	農薬名	検出 限界 (ppm)	農薬名	検出 限界 (ppm)
有機リン系農薬					
EPN	0.01	ジクロフェンチオン	0.01	フェンクロルホス	0.01
イソフェンホス	0.01	ジメチルビンホス	0.01	フェンスルホチオン	0.01
イプロベンホス	0.01	ジメトエート	0.01	フェンチオン	0.01
エチオン	0.01	スルプロホス	0.01	フェントエート	0.01
エトプロホス	0.005	ダイアジノン	0.01	ブタミホス	0.01
エトリムホス	0.01	テトラクロルビンホス	0.01	プロチオホス	0.01
カズサホス	0.01	テルブホス	0.005	プロパホス	0.01
クロルピリホス	0.01	トルクロホスメチル	0.01	ホサロン	0.01
クロルピリホスメチル	0.01	パラチオン	0.01	マラチオン	0.01
クロルフェンビンホス	0.01	ピペロホス	0.01	メチダチオン	0.01
シアノフェンホス	0.01	ピリダフェンチオン	0.01	メチルパラチオン	0.01
シアノホス	0.01	ピリミホスメチル	0.01	メビンホス	0.01
ジオキサベンゾホス	0.01	フェニトロチオン	0.01		
有機塩素系農薬					
BHC (α, β, γ 及び δ の和)	0.005	クロルフェナピル	0.01	トリアジメホン	0.01
γ -BHC(リンデン)	0.002	クロルフェンゾン	0.01	プロシミドン	0.01
DDT (DDE,DDD,DDT の和*)	0.005	ジクロラン	0.01	プロピザミド	0.01
アルドリン及び ディルドリン	0.005	ジコホール	0.01	ブロモプロピレート	0.01
エンドスルファン (α, β の和)	0.005	テトラジホン	0.01	ヘプタクロル (エポキシドを含む)	0.005
エンドリン	0.005				
ピレスロイド系農薬					
アクリナトリン	0.01	デルタメトリン及び トラロメトリン	0.01	フェンプロパトリン	0.01
シハロトリン	0.01	ハルフェンプロックス	0.01	フルシトリネート	0.01
シフルトリン	0.01	ビフェントリン	0.01	フルバリネート	0.01
シペルメトリン	0.01	フェンバレレート	0.01	ペルメトリン	0.01
テフルトリン	0.01				
含窒素系農薬					
アセタミプリド	0.01	テトラコナゾール	0.01	ブプロフェジン	0.01
イソプロカルブ	0.01	テブコナゾール	0.01	フルジオキシニル	0.01
エスプロカルブ	0.01	テブフェンピラド	0.01	フルトラニル	0.01
カフェンストロール	0.01	トリアジメノール	0.01	プロメカルブ	0.01
クレソキシムメチル	0.01	ピリプチカルブ	0.01	ヘキサコナゾール	0.01
クロルプロファム	0.01	ピリプロキシフェン	0.01	ペンコナゾール	0.01
シメトリン	0.01	ピリミノバックメチル	0.01	ミクロブタニル	0.01
チオベンカルブ	0.01	フェナリモル	0.01	メトラクロール	0.01
チフルザミド	0.01	ブタクロール	0.01	メトリブジン	0.01

※ DDTはp,p'-DDE、p,p'-DDD、o,p'-DDT及びp,p'-DDTの和

【農薬解説】

アセタミプリド

『モスピラン』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。広く使用されている有機リン系農薬などに対して効きにくくなった多くの害虫に対しても効果があります。

今年度実施した検査では、ぶどう、もも、ブロッコリー及びチンゲンサイからも検出されました。

エンドリン

日本では1975年に農薬登録が失効されました。その後、1981年に化学物質審査規制法(化審法)に基づく「第1種特定化学物質」に指定され、すべての用途での製造、販売及び使用が禁止されました。長期間に渡って環境及び生態系に残留することが知られており、それらに及ぼす影響が大きいため、現在では多くの国で使用が禁止されています。

シハロトリン

『サイハロン』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。果樹や野菜などの害虫に効果があり、家畜防疫用としても使用されています。また、耐雨性及び耐光性に富み、長い残効性があります。

シベルメトリン

『アグロスリン』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。広く使用されている有機リン系農薬などに対して効きにくくなった多くの害虫に対しても効果があります。また、耐雨性及び耐光性に富み、長い残効性があります。

今年度実施した検査では、チンゲンサイからも検出されました。

マイクロブタニル

『ラリー』などの商品名で一般的に販売されている殺菌剤です。野菜や果樹などのうどんこ病、さび病、黒星病などに有効的で、予防効果と治療効果を併せ持っています。

今年度実施した検査では、えだまめからも検出されました。

参考文献

- ・社団法人日本植物防疫協会，農薬ハンドブック2001年版
- ・農薬残留分析法研究班，最新農薬の残留分析法(改訂版)

【 微量汚染物担当 】

平成21年度 公衆浴場浴槽水の水質実態調査

横浜市内の公衆浴場における施設の衛生管理状況を把握することを目的として、浴槽水の水質実態調査を行いました。

1 対象施設及び試料

- (1) 対象施設: 公衆浴場145施設
- (2) 採水日: 平成21年7月21日から平成22年3月8日
- (3) 試料: 白湯265、温泉57、薬湯42、その他7(足湯1、海洋泉4、死海の深層水1、死海の泥1)の計368試料
再検査7試料(白湯3、温泉1、薬湯3)

2 検査項目

- (1) 福祉保健センター現場検査項目: 遊離残留塩素濃度^{*1}、pH^{*1}、水温^{*1}
- (2) 衛生研究所検査項目: 大腸菌群、レジオネラ属菌、過マンガン酸カリウム消費量^{*2}、濁度^{*2}、一般細菌^{*1}

*1 水質基準に該当しない参考項目

*2 過マンガン酸カリウム消費量及び濁度については、温泉、薬湯及びその他の試料では原則として検査対象外としました。

3 検査方法

水質基準項目については、神奈川県公衆浴場施行細則第7条第2項に定める方法、その他の項目については上水試験方法等に準じて行いました。

4 検査結果

公衆浴場145施設の浴槽水371試料の試料数及び水質基準不適合試料数を表1に示しました。水質基準に適合しない試料は6施設8試料(白湯5、温泉2、薬湯1)でした。

表1 浴槽水の試料数及び水質基準不適合試料数

浴槽水	白湯	温泉	薬湯	その他	合計
試料数	265	57	42	7	371
水質基準不適合試料数	5	2	1	0	8

(1) 検査項目別の試料数及び水質基準不適合試料数

検査項目別の試料数及び水質基準不適合試料数を表2に示しました。レジオネラ属菌は23試料のうち7試料(白湯4、温泉2、薬湯1)、過マンガン酸カリウム消費量は白湯263試料のうち1試料が水質基準に適合していませんでした。また、大腸菌群及び濁度については白湯では基準にすべて適合していました。なお、過マンガン酸カリウム消費量及び濁度については、温泉、薬湯及びその他の試料では原則として水質基準を適用しません。

今回の検査では、レジオネラ属菌の基準超過率は30.4%で、他の検査項目の基準超過率(濁度0%、過マンガン酸カリウム消費量0.4%、大腸菌群0%)に比較して非常に高い値を示しました。

また、遊離残留塩素は41試料(白湯16、温泉13、薬湯12)が0.2mg/L未満の値を示しました。

表2 検査項目別の試料数と水質基準不適合試料数

検査項目	基準不適合試料数/試料数				水質基準
	白湯	温泉	薬湯	その他	
大腸菌群	0/265	0/57	0/42	0/7	1cfu/mL以下であること
レジオネラ菌属	4/12	2/9	1/2	0/0	10cfu/100mL未満であること
過マンガン酸カリウム消費量	1/263	20/33	5/30	4/5	25mg/L以下であること
濁度	0/263	0/33	2/30	0/5	5度以下であること
遊離残留塩素	16/265	13/55	12/41	0/5	0.2mg/L以上(参考値)
pH(参考項目)	-/260	-/51	-/39	-/6	
一般細菌(参考項目)	-/265	-/57	-/42	-/7	

- :水質基準適用対象外

(2) 水質基準不適合施設における施設別の水質検査結果

水質基準に適合しない6施設8試料の結果を施設別にまとめ表3に示しました。

過マンガン酸カリウム消費量が不適合であった白湯1試料(試料No.8)については濁度0.5度、遊離残留塩素が0.1mg/L以下の値を示し、一般細菌数180cfu/mLでしたが、大腸菌群は検出されませんでした。この浴槽水では市水道水が使用されており、乾燥ハーブが浮いていました。

レジオネラ属菌が水質基準に適合しない5施設7試料(試料No.1~7)で検出されたレジオネラ属菌数は $10^1 \sim 10^3$ cfu/100mLで、分離された菌種はすべて *Legionella pneumophila* でした。7試料の遊離残留塩素は0.2mg/Lから2.0mg/Lで、遊離残留塩素があってもレジオネラ属菌が検出されていました。特に施設Dの白湯は遊離残留塩素が0.7mg/L検出されているにも係わらず、一般細菌数が1,100cfu/mL、レジオネラ属菌が1,600cfu/mLを示していました。この白湯では地下水を原水として使用していたことから、引き続き結合残留塩素の有無の精査が必要と考えられました。

水質基準を超過した6施設については、所管する福祉保健センター生活衛生課環境衛生係が衛生指導を行いました。後日、施設Aの白湯、薬湯についてはレジオネラ属菌の再検査を2週間~1ヶ月間隔で3回実施しましたが、レジオネラ属菌は検出されませんでした。また、施設Eの温泉についても再検査を1回実施しましたが、レジオネラ属菌は検出されませんでした。

表3 水質基準に適合しない6施設8試料の施設別の水質検査結果

施設	試料	浴槽水	濁度	過マンガン酸 カリウム消費量	大腸菌群	レジオネラ 属菌	一般細菌	遊離残留 塩素
	No.	種類	(度)	(mg/L)	(cfu/mL)	(cfu/100mL)	(cfu/mL)	(mg/L)
A	1	白湯	0.1未満	13	0	70	11	2.0
	2	薬湯	-	-	0	490	33	0.5
B	3	白湯	0.1未満	6.9	0	20	32	0.2
	4	温泉	0.6	25超	0	50	67	0.3
C	5	白湯	0.1未満	5.4	0	10	1	0.7
D	6	白湯	0.1	8.3	0	1,600	1,100	0.7
E	7	温泉	-	-	0	410	2,700	0.2
F	8	白湯	0.5	42	0	-	180	0.1以下

太字:水質基準超過

- :検査未実施または検査対象外

レジオネラ症患者の報告数は横浜市内で平成18年7名、平成19年28名、平成20年32名と増加しています。その感染原因のひとつとして、公衆浴場が考えられています。

レジオネラ属菌は単独で水中に浮遊している場合には、0.2mg/Lの遊離残留塩素に1分間接触させれば殺菌されますが、ろ過器や配管等のバイオフィルムに生息するアメーバから水中に放出される場合には、1.0mg/Lの遊離残留塩素があっても、すぐに殺菌ができません。レジオネラ属菌数を抑制するには、遊離残留塩素の濃度管理の他に、浴槽やろ過器を含めた浴槽水の循環経路の衛生管理が重要です。

【 水質担当 】

感染症発生動向調査委員会報告 2月

今月のトピックス

- インフルエンザ検出状況は、市内ではすべて新型インフルエンザのみです。
- 感染性胃腸炎は、緑区、泉区、神奈川区が警報レベルです。
- 流行性耳下腺炎は、瀬谷区、泉区が注意報レベルです。
- 麻しんの家族感染と、学級内感染が認められました。全員に予防接種歴が1回もありませんでした。

平成22年1月25日から2月21日まで(平成22年第4週から第7週まで)。ただし、性感染症については平成22年1月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成21年 週 - 月日対照表

第4週	1月25～31日
第5週	2月 1～ 7日
第6週	2月 8～14日
第7週	2月15～21日

全数把握疾患

< 麻しん >

2008年1月から感染症法における5類感染症の全数把握の対象となり、診断した医師すべてに届出が義務付けられました。

(国立感染症研究所 HP <http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/index.html>)

2月は24日現在で11例の届出があり、うち5例はきょうだいであり、5例とも予防接種歴が1回もありませんでした。さらに2例はきょうだいのクラスメイトで、やはり1回も予防接種歴がありませんでした。中学1年、高校3年相当の年齢にMRの 期、 期が行われるのは、2008年から2012年までです。ワクチン接種による予防の大切さを周知していく必要があります。

< 急性脳炎 >

1例の届出があり、1月以前の追加届出も4例ありました。新型インフルエンザによるものが2例、迅速診断キットでインフルエンザA型陽性が2例、1例は原因病原体不明です。

< 腸管出血性大腸菌感染症 >

1月の追加届出が2例ありました。2例とも、レバーの生食によるものでした。内臓を含む肉類には十分な加熱が必要です。

一次医療機関の腸管出血性大腸菌感染症の対応については、次をご参考下さい。

(横浜市衛生研究所 HP http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/infco157_guide.html)

< HIV感染症 >

1例の報告がありました。すでにAIDSを発病している状態でした。性感染症は、予防できる疾患です。感染予防が何より大切ですが、仮に感染しても、早い時期に診断できることで、適切な時期に医療が提供でき、パートナーへの感染予防が可能になります。感染予防に加え、検診の機会の周知が必要です。

2月12日に発表された厚生労働省エイズ動向委員会報告によりますと、2009年の年間報告の速報値は、国内で新たに報告されたHIV感染者数は1,008件で過去3位、エイズ発症者数は420件で過去2位であり、双方最高だった平成20年より減少していますが、検査が150,252件と昨年より約27,000件減少、相談件数は193,271件と、約37,000件減少しているため、決して増加に歯止めがかかった状態では無いと思われま

す。(エイズ動向委員会報告 http://api-net.jfap.or.jp/mhw/survey/mhw_survey.htm)

定点把握疾患

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点:88か所、内科定点:57か所、眼科定点:18か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計192か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の11感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計145定点から報告されます。

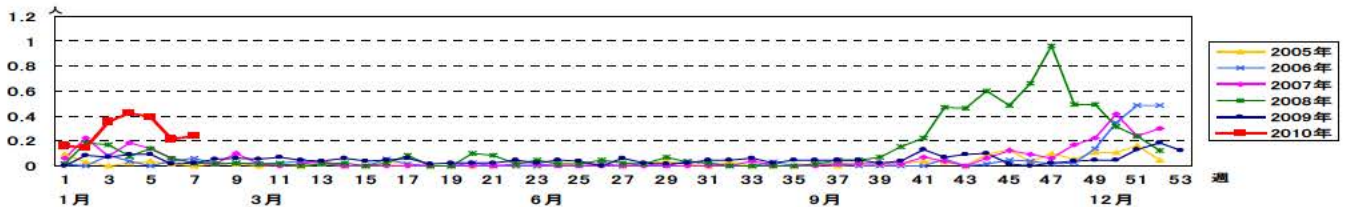
<インフルエンザ>

今シーズンは、第44週(39.18)をピークに、漸減し、第7週では1.65まで低下しています。この時期としては、例年に比べると報告数が少なく、過去6年で最少となっています。

市内におけるインフルエンザウイルスの検出状況は、すべて新型インフルエンザのみです。

<RSウイルス感染症>

定点当たり0.24と、この時期としては比較的高く推移しています。届出には、抗原の検出かペア血清での抗体検査が必要ですが、抗原の迅速検査が入院対象でしか保険適用が無いために、届出が患者数を直接反映しにくく、定点報告数での比較ができないとされています。



<感染性胃腸炎>

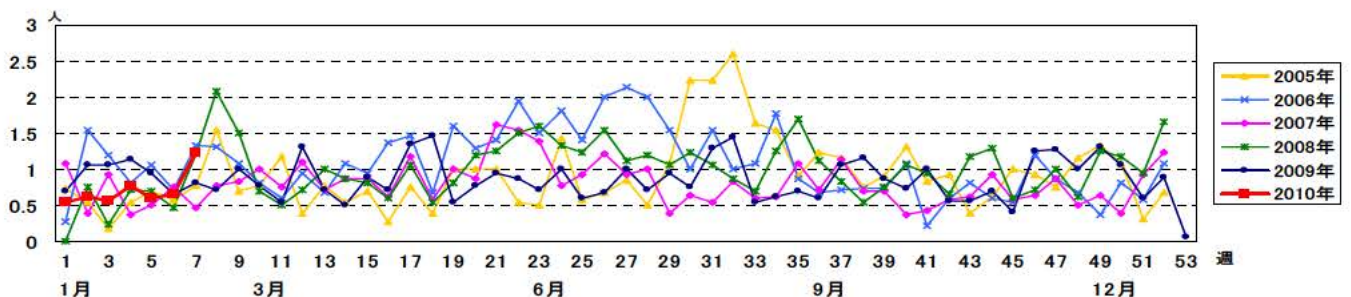
例年と異なり、今年に入り上昇が見られています。第7週では定点当たり10.81であり、行政区別では、緑区が27.50と警報域であり、泉区が17.75、神奈川区が16.50と終息基準に達していません。ノロウイルスによる学校等施設内集団感染の報告もありますので、施設管理者の注意が必要です。全国12.45、県域13.20、川崎市15.94、東京都11.55と何れも横浜市より高い値です。

<流行性耳下腺炎>

定点当たり0.79ですが、瀬谷区4.00と泉区3.25が注意報のレベルです。全国0.96、県域1.01、川崎市0.22、東京都0.62です。

<流行性角結膜炎>

定点当たり1.22ですが、瀬谷区が9.00と警報レベルです。全国0.53、県域1.11、川崎市0.86、東京都0.46です。



<性感染症>

性感染症は、産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。1月は、2009年12月に比べて全体としては横ばいです。性器クラミジア感染症は、男性17例、女性11例でした。性器ヘルペス感染症は男性7例、女性13例でした。尖圭コンジローマは男性6例、女性5例でした。淋菌感染症は男性8例、女性3例でした。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:5か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所の計17か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

<ウイルス検査>

2010年2月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点52件(鼻咽頭ぬぐい液45件、ふん便7件)、内科定点10件(鼻咽頭ぬぐい液)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎23人、インフルエンザ15人、胃腸炎8人、RSウイルス感染症3人、伝染性紅斑症1人、口内炎1人、発熱のみ1人、内科定点はインフルエンザ5人、気道炎5人でした。

3月10日現在、小児科定点のインフルエンザ患者13人と気道炎患者4人、内科定点のインフルエンザ患者3人から新型インフルエンザウイルス(AH1pdm)、小児科定点の気道炎患者1人からRSウイルスが分離されています。

これ以外に、PCR検査では小児科定点の気道炎患者4人、胃腸炎患者2人、インフルエンザ患者1人、RSウイルス感染症患者1人、口内炎患者1人、内科定点のインフルエンザ患者1人、気道炎患者1人からAH1pdm、小児科定点の気道炎患者8人、RSウイルス感染症3人、インフルエンザ患者2人からRSウイルス(このうち気道炎患者3人、RSウイルス感染症2人、インフルエンザ患者からはAH1pdmも重複して検出)、胃腸炎患者3人からそれぞれノロウイルスG2型、コクサッキーウイルスA6型、アデノウイルス41型(AH1pdmも重複して検出)、気道炎患者1人からライノウイルスが検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

<細菌検査>

2月の感染性胃腸炎関係の受付は1件で起因菌は検出されませんでした。

大腸菌の受付は10株で腸管出血性大腸菌O157、VT1&2が3株と腸管病原性大腸菌が1株検出されました。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は5件でA群溶血性レンサ球菌が4件から検出されました。血清型はすべてT1でした。

百日咳の検体受付は2件で百日咳菌は検出されませんでした。

【 感染症・疫学情報課 検査研究課 ウイルス担当 】

感染症発生動向調査における病原体検査2月

感染性胃腸炎

検査年月	2月			2010年1~2月		
	小児科	基幹	その他	小児科	基幹	その他
定点の区別						
件数	1	7	3	1	18	9
菌種名						
赤痢菌					1	1
腸管病原性大腸菌		1			1	
毒素原性大腸菌						
組織侵入性大腸菌						
腸管出血性大腸菌			3			8
腸管凝集性大腸菌						
黄色ブドウ球菌						
カンピロバクター						
不検出	1	6		1	16	

その他の感染症

検査年月	2月			2010年1~2月		
	小児科	基幹	その他	小児科	基幹	その他
定点の区別						
件数	5		2	10	2	4
菌種名						
A群溶血性レンサ球菌	T1	4		5		
	T2					
	T3					
	T4					
	T6					
	T12			1		
	T13					
	T25					
	T28					
	T B3264			1		
	T 型別不能					
B群溶血性レンサ球菌						
百日咳菌						
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌					2	
バンコマイシン耐性腸球菌						1
インフルエンザ菌						
肺炎球菌						
大腸菌						
不検出		1	2	3		3

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

[細菌担当]

衛生研究所WEBページ情報

(アクセス件数・順位 21年度1月分、電子メールによる問い合わせ・追加・更新記事 21年度2月分)

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、1998年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を提供しています。

2008年4月、市民にわかりやすくかつ迅速な情報提供を目指して、リニューアルを行いました。

今回は、2010年1月のアクセス件数、アクセス順位及び2010年2月の電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については行政運営調整局IT活用推進課から提供されたデータを基に集計しました。

1 利用状況

(1) アクセス件数 (2010年1月)

2010年1月の総アクセス数は、164,310件でした。主な内訳は、感染症60.2%、食品衛生14.8%、保健情報11.9%、検査情報月報3.4%、生活環境衛生1.3%、薬事1.8%でした。

(2) アクセス順位 (2010年1月)

1月のアクセス順位(表1)は、第1位が「マイコプラズマ肺炎について」、第2位が「衛生研究所トップページ」、第3位が「感染症発生状況」でした。

第1位に「マイコプラズマ肺炎」が入りました。

国立感染症情報センターの報告によりますと、マイコプラズマ肺炎の定点あたり報告数は、第51週(12/14～20)、第52週(12/21～27)と2週連続で減少しましたが、第3～4週(1/18～31)と2週連続で増加しています。

第4位に「ロタウイルスによる感染性胃腸炎について」、第9位に「ノロウイルス(ノーウォーク様ウイルス、SRSV)による感染性胃腸炎について」と、冬期に流行する感染症についてのアクセス件数が増加しています。

また、第3位に「感染症発生状況」、第6位に「感染症トップページ」が入りました。

インフルエンザを含め感染症情報についての関心が高いことが原因と思われます。

第5位に「大麻(マリファナ)について」、第8位に「MDMA(通称:エクスタシー)について」と、先月に引き続き、薬物関係の記事が入りました。

有名芸能人を裁く初めての裁判員裁判になるとみられることもあって、関心が高いことが原因と思われます。

表1 2010年1月 アクセス順位

順位	タイトル	件数
1	マイコプラズマ肺炎について	5,524
2	衛生研究所トップページ	3,939
3	感染症発生状況	3,457
4	ロタウイルスによる感染性胃腸炎について	2,842
5	大麻(マリファナ)について	2,754
6	感染症トップページ	2,636
7	性器ヘルペス感染症について	2,415
8	MDMA(通称:エクスタシー)について	2,370
9	ノロウイルス(ノーウォーク様ウイルス、SRSV)による感染性胃腸炎について	2,334
10	B群レンサ球菌(GBS)感染症について	2,186

データ提供:行政運営調整局IT活用推進課

(3) 電子メールによる問い合わせ (2010年2月)

2010年2月にホームページのお問合わせフォームを通していただいた電子メールによる問い合わせの合計は、2件でした(表2)。

表2 2010年2月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
百日咳について	1	衛生研究所(感染症・疫学情報課)
転倒・転落について	1	衛生研究所(感染症・疫学情報課)

2 追加・更新記事 (2010年2月)

2010年2月に追加・更新した主な記事は、7件でした(表3)。

表3 2010年2月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
2月2日	A型肝炎について	更新
2月3日	牛海綿状脳症(BSE、狂牛病)と(新)変異型クロイツフェルト-ヤコブ病について	更新
2月12日	感染症に気をつけよう (2月号)	追加
2月17日	髄膜炎菌性髄膜炎について	更新
2月18日	高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)の発生状況	更新
2月18日	横浜市における麻しん患者届出状況 (2010年)	追加
2月18日	肺炎球菌感染症について	更新

【 感染症・疫学情報課 】